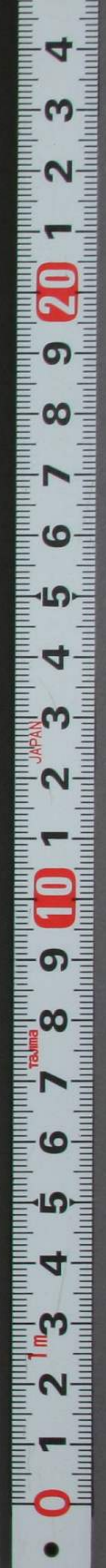


特別
13
3521
3



門 13
3521
3



金雞新話卷之三

悪婆欺孝女

東武岳亭主人撰編



実けあや好かう賣トの門もんを出いば悪あく賣トの千せん里りを走まるのろろろひ彼か
 吾わが妻ま屋やが家いあての娘むすめ雪ゆき見み小こ婿むこととて家いを続つせんこ
 とれど誰たれりみとるく雪ゆき見みの彼か盗と賊ぞく余よ吾わが平へい分ぶん為なる小こ捕とら
 せしころとも又またの古ふる井いの中なかより夜よをくま日あ光ひりゆの頭あたま
 のど或ある井いの底そこ人ひと走はるるるく専せんら小こ沙さ汰たはる程ほどの
 一ひと大おほ形かたち小こ吼こゑて万まん大おほ声こゑ小こ吼こゑる諸しよの如ごとく万まん般ぱんの悪あくき噂うわさ
 る程ほど小こきし由よし美み藤ふじる雪ゆき見みるほど誰たれ在ある如ごとく小こ婿むこみる



昭和二十九年
七月九日
長崎

とりぬ者多く然るに座して喰ふ山も空くと漸々貧
しくもゆく小召使の男女も残り多く皆故御へ帰
今の只廣やうなる家小母と雪児のま住人も無益
と邊り近き死小膝を容るばうりの蝸戸ありしを購
ひ得て今逆の家を賣物小出しく古井の怪をあり
どりの噂をきいて誰有て吾東屋が旧宅を賣んと
彼伊勢の師の詠うけんせ小代り行賣り多く只空
りて化物屋舖同然小云ひてや近下るのめも
く斯く後小母親の彼是のまを苦小病て竟小重死病小
打取く雪児の有小あむ思ひ手づる菓を應へ食賣

と調へ母小与へ益夜看病等困るげ然ども病の日々小
重り今の唯頼まると光景る或醫生雪児小對ひ此
病の年来の辛苦積りてる所るが一通り小
治し難く予が家の秘法小仙授丹といける各菓あり最
價のく尊く大くこの端金小調へる菓が強り
とめ進ませば此く用ある病の平愈るはた
こと欲と療治をあく交小云ひて歸りける雪児ハ元来
深き性質る万金をとめて其菓を需めると百般
くろと碎きつ雪児つる思ふやう寔小人間の禍福ハあき
るる繩のさしと申し吾身首め淀小ありし時ハ止賣る

と結号もあつしとせぬぬまき入空しく成行て市人こらるる
ども黄金ふの夏を夕とく百金や二百兩の硯匣も有つ
る身が今の僅の端金ふ困り母の病ひも治されぬ抑何の報
ひゆて斯る憂目ふあふことぞと悲嘆の泪ふれゆる此隣
の家小阿熊とよる老波女あり原の江口神ざたるこの花街
ふあつて色を高く遊女うらぐ其後の彼方さうし吟呻あ
らぬ小夜衣の妻とらさる有と有のさうさ夏の際うを辱
婦婦小殊小酒を嗜ま哀度道を好む鳥詩のえせ者
さうさけ程よう造化とろく一盃の酒さ人吃ば居さうし
何ぐる金の蔓小有つらんと万般工夫をめぐらさる今
今

児が母の病のくはりの代小指つうて目も浮きさうし悲む
をえて風と心小一計を思ひつた此日二冊の物の本さ手小携
へ雪児が家小入来り雪脚よのが脚座らん昨日より開
て一向小訊ひ進ませざり母脚の病ひのう小脚座ぞ某さう
服玉ひや脚身もそのやう小俯臥て母脚のこのさ苦ゆま
を同トく病が發るぐ下走は是小持まつるのの本あつと
面白し書るれば是るを見て女小心を慰め玉く是れその
昔孝行する娘ありて親の貧苦をかろく思ひ花街へ身
を賣て兩人の親をさうし一話まこ小哀れ小面白るれば小
借て読せんと今さうし持まつらう此二々よとて慰め玉へと

三行 活 三

雪児が膝小投やれが雪児の是を手小うて其是つまらなく
 読ころ小孝女親のこめ小身を賣の物ごころまうたれに見る
 よう不計思ひつた吾もはごころ身を賣て彼各業を買わ
 とめ母の病のを愈さんふいと心一箇小思ひ定め阿熊婆を一
 邊小招き声を低めて云けるやう妻が母君の病のこく六借
 くまのめも医師の白くふの仙授丹とゆる業を用うるま
 病の頓ふりもべたれど價高きまはるるが恨みごころと白へ
 妾も是ふさしつる人奈何せんと思ひが今此本を足るふ
 つけ妾も今よう身を賣て彼仙授丹をまくめめ母の病
 ひを助け進せんと思つる老女御の曲輪小知己おやく

御座るは隣のようにも此まを福徳てくるひひりて云き
 して泣ふたり阿熊の是を岡ようも謀計るれりと心中の
 情びるが陽面小の尚あふさば大志あげて空澄し少
 時あつて云やう儲もく徐不ど孝心うた婦児の世果
 まこと有しか其孝心を天帝ゆりてう憐れをあらさん
 母御の病もと不かく本服して原の御身とるるべたるり
 然りの人今まで深窓ふひとるう未透間の風ごふいとひし身
 が見ても知あぬ花御小賣と妻くの人の心をうり情と商
 ん憂つとあ争でう得堪まふべた外小仕操はるたごころと云
 つ又も大志あげ泣くとまれど泪でば一邊小あひ吞は

の茶^{ちや}とんの水^{みづ}を指^{ゆび}小^こつけ睡^{まど}ふゆつて泣^なるるる茶^{ちや}洋^{やう}のつた
も可笑^{可笑}々々雪^{ゆき}児^この再^{また}度^{たび}顔^{かほ}をあげ假^{かり}令^し此^こ身^みの肉^{にく}
みろつとて母^{はは}の命^{いのち}ぞ小^こ目^め出^で度^{たび}の夫^{おとこ}おまゝとて情^{なさけ}惟^{ただ}ま
願^{ねが}ひつゝ老^{おきな}女^{によ}御^ごよ疾^{とく}曲^{まが}輪^{りん}小^このゆたてはこそ補^{おぎな}心^{こころ}憊^うへと強^{あきら}
ち小^こ言^いける小^こぞ阿^あ熊^{くま}のるるる吞^くへてりみやう徐^{ゆる}然^{しか}まろ小^こ
思^{おも}ひつめあひまろるる吾^{われ}一旦^{いつたん}花^{はな}街^{まち}小^こ行^ゆて高^{たか}議^ぎして来^きた
暫^{しば}の同^{おな}待^{まち}久^{ひさ}くと小^こ禮^{れい}かゝけて神^{かみ}寄^よ花^{はな}街^{まち}へとてこそ心^{こころ}
死^し行^ゆ々々

雪^{ゆき}児^こ改^{かへ}吾^{われ}妻^{つま}

其^{その}次^{つぎ}の朝^{あさ}己^{おのれ}のとた計^{はかり}り小^こ到^{いた}りて神^{かみ}山^{やま}奇^きの曲^{まが}廻^{まわ}小^こと雪^{ゆき}児^こは

木^き屋^やの長^{なが}きまろるる大^{おほ}輜^{しゆ}かづりせ阿^あ熊^{くま}のるるも雪^{ゆき}児^こ
家^{いへ}小^こ入^い来^きるるれ雪^{ゆき}児^こ出^でて阿^あ熊^{くま}小^こ点^ち頭^づ礼^{れい}をのづる阿^あ熊^{くま}
細^{こま}音^ね小^こて言^いやう昨日^{きのう}の玉^{たま}ひく夏^{なつ}を此^こいむる木^き屋^やの主^{ぬし}
人^{ひと}小^こ高^{たか}議^ぎして立^た地^ち小^こ伴^{ばん}ひ赤^{あか}とるる是^{こゝ}印^{いん}の夏^{なつ}まども宜^{よろ}
く談^{だん}話^わあつとて丁^{てい}寧^{ねい}小^このひれれば雪^{ゆき}児^こもよろこび茂^{さか}木^き
屋^や小^こ礼^{れい}をのづる茂^{さか}木^きの此^こ雪^{ゆき}児^こをみるる小^こ鳥^{とり}ひびいて賤^{しん}か
らば婢^{めかけ}婿^{むこ}とて美^{あて}難^{やん}るるる長^{なが}が情^{なさけ}び大^{おほ}くこるるは
此^{こゝ}處^{ところ}女^{によ}斯^かやうとて暮^くして小^こ此^こ若^{わか}く美^{うつく}しく小^こ廓^{くわく}馴^な
させるる夜^よ光^{ひかり}玉^{たま}人^{ひと}の手^てを徑^へるる如^{ごと}くよれ吾^{われ}家^{いへ}の揺^ゆ残^{ざん}樹^{じゆ}
ろるる立^た地^ち小^こ典^{てん}身^み三^{さん}百^{ひゃく}兩^{りやう}小^こ極^{ごく}めたる雪^{ゆき}児^この太^{おほ}い小^こ打^{うち}情^{なさけ}



ひ然ひぜん二人の婢女こしもとをやとひて母の看病かんびょう小付つげあへんと云々いひを
阿熊あぐまがのりやう否いなう母卿ははけいの更さらの聖せい慮りょあへる五ご口くち毎日まいにち閑ひま暇ひまの
朝あさ夕ゆふ者もの病びょうと云いたもう唯ただ疾はやく々はやく往いめんと強あまち小こ侑ゆうめらるらる聖せい
児この今いまさう名な残ざんをしく立たち地まち阿あとは泣ないぐぬ母ははのけきさめつ
けていと苦くるげらるらるき音ね小こて雪ゆき見みよいう小こぞ致いたせううと屏びん
風かぜの中なか小こて云いたるを雪ゆき見みの爰こゝぞと函てをさへひくめ漸あらう小こ泪なみだを
止とめ母はは君きみよ妻つまの今いまうう四五里四五里先さきへ薬くすりをい買かひ小こ赤あからるらるらるらると
今いま宵よの極きまめて帰かへりのせど隣となりの老お女んな卿けいを者もの病びょう小このそむた
それの東あづまううとも待まちめんと云いさうして又また泣なつ左ひだり右みぎうて間まだらける
小こぞ其その茂しげ木きの是こゝを見て斯かくての果はたとと雪ゆき見みをい抱いだ強まて来き

物もの小このせうもむむ更さら小こ馴なるらる轎かこ夫つまども立たち地まち衆しゆ轎かこうら揚あげ
神かみさたさうてぞ走あり行ゆ雪ゆき見みの泪なみだ滝たきのぞく轎かこの襦じゆをううう不ふ
うう阿熊あぐま門かどの戸と引ひきめて迹あとふつたそひ急いそ死し行ゆ斯かくて
其その夜よ茂しげ木きが許ゆるして万ま般ぱんと高たか議ぎとらへ阿熊あぐまが娘むすめ介ま介ま
て證あかし文ぶんと云いため阿熊あぐまが一ひと宗そうの甘あま室むろ八はちとのみ者もの小こ受う判はんささき万ま
端はなは更さらと云いひたれを頓たふて主人あなの三さん百ひゃく兩りやうを雪ゆき見み小こ渡わたしぬ雪ゆき
児この此この金かねの中なかを三さん十じゆ兩りやうをうう紙かみふつとけ程ほどの謝あやま礼れいゆと
阿熊あぐまが手て小こ渡わたしぬ阿熊あぐまの頭かぶを打うちうて彼かむらうのこ
ううとて何なんぞ謝あやま礼れいと云いつらんや行ゆきたるううた老お婆ばあさん
小こぞ金かねううのこ後ご生せいの妨さまたげまううの時とき々々小こ実まの祖そ母ぼとの商あ

て和しき言をうけて給と四金の雪児ふさ、戻は雪児の
くさく、侷むとどめ阿熊の更み受とらば左右して早二更
の頃とらぬ阿熊雪児ふのやう今に夜ふゆさぬ帰るがこ
く今宵の御身と二處ふのして明るを疾々帰るく母御
のまの放心あふ隣へ木々く頼るそまぬ今宵の寐さ
せぬと二玉を廿次木の指圖して阿熊雪児の兩人のものを
眞の間へこそ遣らぬ二人の奥の二間ふのして女時して
雪児私用を足んと思ひ青椿へ行く其迹めて阿熊のむ
くと起より彼三百両を盗とらう再度主人の居室ふのう
吾身今宵泊らんと云うと急死の要度を忘れて来

つと今より歸家といふと云捨て外面へいざ行
ぐと知は逃うせらう雪児の迹めて是を賞する主人小斯と
告ぐと長も大い小駭きと立地小人を駈て阿熊の家
小遣らぬと阿熊の一向小家小帰らば夫より諸方を
尋むとれども竟小其去方をあはば空しく人々引返
ぬ雪児の口管度方ふれ歎きの上の悲しき血の泪
を流らる廿次の長は是を見ゆ又新小百兩の金とせか
あへ、雪児が母を曲輪へむる人形をうらの家と需の婢女
をかへて看病せさせ彼仙授丹を買ゆとめ妻く腹させぬ
抱しける然ども定まる業小や有らん兩月をうりこそえらる

時竟小虎子くろくけるあど雪児が悲しく大くうらぶ天
心狂浮地あつて同い道ゆと歎きく今五口身もいふ
身小あつて詮方ささど小人を頼ま北邨一返の煙とさし
野辺の送りを活業たり借しも斯て有べたるぬ雪児
た吾妻と名を改め突出し之首より全盛双ぶ方もろく
落木屋の五口妻とよびて名高き旗女とさつふらう鳴呼
是その昔の陶朱倚頓小勝りける持丸長者の家小産
此中将との嫁君あもろくべた身あて有らるを立地小零落
て斯浅まら身とさつら哀れといふも思心さつ

得金損衆人

借も吾妻屋東作か古家の住人もろくのよく荒ふあぬ
果て彼古井より夜みく光り物露を其上井の中あつ
夏人の音ささどあつらと衆人専ら云解して夜あつりてそ
誰有ては家の邊をを通るゆめ二人もさし爰小都方の浪
人小卯木佐和弥太といふ者あつ頗る才学あつる者さつて
香花茶茶道蹴鞠ささゆめ此の心得ありといふども其大質
奸佞邪曲あつて人を損ふの曲者ささの竟小の斯浪人
て今浪速の地あつて手習子を集めて漸々と世渡る活
業とさし居らう近來吾妻屋か古井戸小光り物あつ人
ささどあつて夜小入ての廿一邊を通る者まらるうと因て

佐和弥太つゞく思ふやう往古中華魏郡の張奮といひ
 其家富ありしが後貧しくつて其家をと他小賣ゆけ家夜
 く妖怪ありて人皆病死に后々いふれ買人も無つて荒
 てを阿丈といひ者け家を買て彼妖怪を見れ其出る
 處を穿ちて若干の金銀を得て豪家とつゞく其妻堅志
 中の書いせつ今吾妻屋が古井の中い正しく若干の金
 銀つづゆと右と左及ぶ處つ然を彼光りゆの正しく黄
 金の精氣光りを放つ處ふして又更小怪む小足ばさるて金
 氣右とつろふハ黄ろ光りを放つ其漢土の書いゆつろ見
 そつろ又人色さるこのふも怕る小足ば金氣の人小化つる其

譬言喻経るど小の書いつろ吾今ようけ古家を買て古井
 を穿ちて其くの黄金を掘出し世を安く送らんゆのとい
 とう心小思ひまよふ土地の莊官の許小ゆれてけを語
 了々めを莊官が曰く彼吾妻屋が古家の今一類死をて
 主るれ家さる住らんと思ひる何時つるとも勝半ゆ
 小栖居つる人斯て古井の妖怪をのぞけは邊りを人の往來
 さつろやう小成るが却てけ方より謝礼を奉るはと合ふ
 るゆぞ佐和弥太大のふ打情ひ其次の日よう人まを雇ひ
 家賊雜具をとをせ二人の下僕と婢女とを引つと彼ろ
 家小移るさつて斯て又数多の人まをよひ集めは古井の

中へ入るめんときどきどの人まゝの以前吾妻屋が時のこと
図ありこれを誰一人是を兼引のりうろくを佐和弥太
のろく思案を廻り誰もあはれ井の中へ入る人者
小の黄金百両を遣りたぐと云けるふぞ欲小あけり血氣ふた
やう若者ども十余人是を兼引るふぞ佐和弥太情ひ夫
より大いづる箱を拵へ太に繩を附て是一人づ一人夫を兼
せ焦火を喚び彼古井の中ふろ下は追まろ下して彼
十余人残るまろ入る時少時ありて井の底ふて嗚呼苦
や助けよくと呼りるま蚊の鳴ぞく響えける佐和弥太つけ
夫引揚よと指揮しつカも尽して引揚るれども今に残るは

毒氣小あろ助るもの一人もろく死果てぞ揚るる佐和弥太
は光景を以て忽ち小後悔五二端の欲小更り斯る大支は
出ろろ是のうて宜るまんと前後十方小暮たて忙然
として居ろける然ども奈何ともせん方ろるは且死るる人ま
の家まへ人を駈て知せつろろるは支を同ようも死るる
人夫の妻女児老人老母叔父叔母いと追々小入来り皆
夫々の死骸おろり付さぬぐの裸言ひてまま小浮喚其
光景の哀むきと醜さをを見る時叫喚地獄小異るるは
佐和弥太の殆ど忙しあろく狼狽をかりろけは時大せいの
人の中より一人の女懐小子を抱きて進み出佐和弥太小向ひ

てのいやく 吾夫欲心ふくく 餘は百兩ふて 雇はまふふ妻あり
 るをを知るがう 井ふ入て死さうの死 謂自業自得ゆて 誰
 を恨ん人もあ 然りとて 餘とのみ頼へるが 斯る横死のせむ
 けたものごとと 女の愚智の思ふぞか 従そのととも 恨むまじ
 唯物束の雇は 賃百兩を 給り侍へ 其ふて 夫の訪吊ひ
 吾身の落着をも さらうぞう 疾々給り候へと云う 小ぞ佐
 和弥太の仰天 吾の唯井の中の 黄金を引あげて 其
 内を分ちとふんと思ひて 百兩と云ふらう 今も百兩のさて
 置いて 金一兩づふあふるごとと 小色ふて 獨言々れ 彼女の云
 やう 井の内の 黄金を 的小頼る 啞方と云う 一人有者ぞや百

兩ふて 極ゆる 夏の死残り 一人夫とわが 證首多う 疾々こそ
 一人とのよけ 理ふと迫りて 一言の辞も 出ば 佐和弥太
 を 黙然と 頭を 低て 居らうらう 是を聞て 大せいの 人夫の
 親らち 祖父 波女 旧妻 幼思 ちひく 佐和弥太 とう巻
 て 吾們的 唯一人の 愚息を 殺し 妻らうの 誰を 頼る 何を 使
 り 小命をつぐん 疾百兩を 給り侍へ といひ 千金 二千金 といひ
 人の 命の 買ひの 物と 子を 僅小 百金 づふて 許すの 命を 主
 買玉ひの 大最や 返さ物ぞう 疾々 吾子の 命の 許す 命を
 侍へ 吾夫の 命の 代を 疾百兩 給ひみか 爺さる 命の
 價早く 百兩下 さいう 四五十人の 老若 男女 變さ 立疑

て佐和弥太一人を取まはし、有商ア、奥小倉蟬のむす一集
 若く若く若く若く佐和弥太の言をかく、万般と言説をのらも
 耳の中も更み、因のれば只管せめて止さう、然るに追入
 文の一族ども入来、て迫る、ゆぞ佐和弥太心小思、やう大勢
 の者との斯言から、まうまうまうまう、迎も空手、おての帰る、まう
 左右、推搡の、小尙官府、小訟へら、め、却て又六借
 か、ん三十六計、走ま、ま、上、は、唯、原、ホ、を、敷、く、あ、て、は、場、を、の
 去、ん、お、わ、と、大、音、ひ、て、エ、け、ら、の、俗、等、大、勢、ま、う、ま、う、く、吾
 今、四、金、と、う、ま、う、百、兩、づ、遣、は、べ、く、と、六、々、は、大、勢、一、同、小
 唇、へ、て、の、入、然、空、を、疾、々、給、り、ま、う、早、う、く、と、通、る、小、そ、佐、和、弥、太



の一間、小の窓を破りて外面へ出、其、但、小、逐、電、く、て、去、は、
 ら、は、ま、う、小、け、り、卵、木、が、奴、子、と、婢、女、と、の、豫、て、ま、う、密、通、
 て、居、ま、う、ま、う、今日、か、ま、う、騒、動、起、り、て、主、人、の、佐、和、弥、太、窓、
 を、破、り、て、逐、電、く、ま、う、を、見、て、是、も、同、く、と、点、頭、あ、ひ、甘、大、邊、
 け、ま、う、小、散、不、ま、う、衣、服、ま、う、と、を、取、集、め、二、枚、思、ひ、引、つ、ま、
 二人、手、小、主、を、引、あ、ひ、て、諸、俱、小、逃、失、ま、う、大、せ、い、の、者、ら、も
 の、女、時、ま、て、ま、う、佐、和、弥、太、が、出、来、ま、う、ま、う、ま、う、お、ひ、く、身、小、
 駈、け、り、て、尋、ぬ、る、小、一人、も、居、ま、う、ま、う、諸、の、五、吾、們、を、敷、死、て、逃、
 失、ま、う、小、疑、ひ、ま、う、と、ま、う、ま、う、は、一、件、の、支、を、在、官、許、へ、ま、う、ま、
 て、卵、木、を、残、し、お、れ、ま、う、死、の、難、具、調、度、兩、の、外、種、ま、の

ものを賣うけたり各々おのづからそれを分わかちて去いりて支さ々の死し骸がいを引ひき
たり吾家わがや々々々々帰かへりたり

殺ころせ老おきな婆ばあ奪うば金かね

婢女めかけと奴子めかけの主しゆ小構こがまの足あし手てをひき外道げだうへ逃にげ行ゆき
しる卯木うらぎの更さら小足こあしと知しば刀やいばをも帯おびを空腰まげひて一いつ張ぢやうの
路費ろひもろく東あづまをさうて走はしりたり程ほどろく日ひの西山にしやま小頑こがん
たおちて空そらも直な暗くらふろけり小こぞ濟た々た深江ふかえとりて死しぶ
到いたり一軒いっけんの旅舎りよどをとり其その夜よいつぐろく泊とどりけり然しかれども
中な一いつ張ぢやうの貯蓄ちよくもろくろけり斯しかてい聖あはの朝宿あさやど賃せんさつ
くありんまも恨うらみは奈何なにかのせんと左ひだりさる右みぎさる考かんがへり風かぜ

と思おもひつ死して飯いひを食くべるまぐろ給仕きよし小出こで女に小こ云いやう小生せうの
都方みやまの者ものろくろ按あん版ばんゆえ療治りやうぢを活業かつごふといひ侍さむらろり
は御家ごけ小泊こどまりり玉たまひ一いつ旗人はたての中な小倘こたうゆえ療治りやうぢをよをせ
あひ人ひとあつば宜よろしく小生せうを徳とく徳とくて給たまはせりといひ云いはれが
下女げに々のごあやうその僮倖さうじやうの更さら侍さむらひは奥おくの室むろ小取ことりあふ
一人ひとりの御老母ごらうぼ御向ごむかうより按あん版ばん療治りやうぢをとりてあ人と今宵こんやを
奈何なにかして常つね小末こまる目め禿かぶ子の見みえ侍さむらひは彼老母かのらうぼを
を頻しばしばり小催こま促まりあふ時ときをば徐おそく行ゆて療治りやうぢして進まり
らせあ人と云いはれり小こぞ佐和さわ弥や大おほくをさ因よて大おほの小こ嬉うれびや
がて奥おくの室むろへ走はしり行障子ゆきざうしを用もちて腰打こしうちり老婆らうば小向こむか



金丸行古表之三

金丸



金丸行古表之三

金丸

ひて小生の按版療治の者小侍御用ひる死やと云
入々の老婆因て大い小情む向より久しく待てびらう益
の程より積氣小て惱も多行此二く版をゆき和くけて
給のれとのみ佐和弥太心得て裡小の然を御療治進
まじしとひて傍小座しるる老母の枕小そひて仰向小
寐轉居る卯木の老婆が胸下より版の下まで撫下し
く或のゆき或の拾り半時をかり撫さまらうるる流石
小心地やうらうらん老婆のまやく睡り小つ死ぬ卯木の老
婆を撫らうらうらうら布被づこ小手をやりて搜り目る小
是のう小百兩づくと覺し死物二箇三箇ありらるる小佐

和弥太心中小駭き諸ものは老婆女何ゆのるる斯大技の
黄金を持ゆるぞや然の鬼まど角まど吾の今一銭よふ
くて今宵の宿銭の的よふまゝ不却は老婆をよめ殺
け黄金を奪ん小いと忽ち醜き悪念を發し老婆が森
息を考へまらう是がゆらる細帯をそと脱外し老婆が
首小ま死つけて力を極めて引しゆらぬを云と一色手足を
ゆが死見小其まゝ死らうらう仕海しと卯木佐和弥太
老婆が死持のつゝを解て行燈の火影小見ゆら正小是
三百兩の黄金まら佐和弥太の天を拜して情ひ其邊ら
小有と有老婆が擔兒を残らばとて襦布小つとて背おひ

奥の障子を引開てえん廻づゝ庭に出松がえふとちり登り
堀をのりこえ逃去々卯木お殺さんけ老婆の是まき
ち阿熊婆る雪児が典身三百兩を盗きて逃さうしつこの
罪立地おれらつまつて卯木がめゆり殺さる天道を善小
福く悪小孽は因果歴然とて廻り巡る嗚呼おそれても
怖るべ死変るべや

勇建脱卯木

卯木佐和弥太のけ家とのがけ出足お任せて走らうか頭
て一箇の高山おさめらぬ爰の是闇暗峠との入死る卯
木の三四里も走らうれば腹中甚しく飢ふのこを責めて水

ど呑んと思へど峠をば水もろ一奈何のせんと猶豫とさる小
忽ち彼方おちくと火の影の見えけるおぞ借の彼處小
人家ありて夜をこめて物まきらる小や有らんと平天走らて
近付見せれば是いろ小雲のぞら大漢児ども車座お圍繞
て林火おあつて居らうと佐和弥太の仰天一借の彼奴
ら火人らう吾今け處を通らして跡へ飯を立地追手
おとらるべし又爰を越んとせば集ら速くお通はへくはと
暫く彷徨かつかへし中も迹への帰らむは今彼奴らのけ
還らう小徘徊して哀彦道をもてあそぶ無頼ものどめら
おて有べきは四五人も投ちくま極めて怖と逃づくべら

むと態と丈夫小見せうけて大股小あひまつは死を逼
つとくさむ彼勢徑どもきうけて汝何奴もさむ吾們が前
を礼をもりきでゆゑ行過るぞ定めて路費の四金あるべし
疾々出せと呼りりる佐和弥太の立とをまうん九そ旅を
る者小路費を用いし知るる更らう又斯る深更小一人旅を
さるかしの管えさうての通しぬらう汝亦漫々の戯言吐く
あゝ命を失ふると飽まで小言アと盗賊どもも大い
怒り憎き雑言波捨ぐぐ支打殺して引脱よと大せの一度小
打てかゝる佐和弥太の心得らうと先小進し三人を右へ左へ
投退る然ども彼方の大せいらさむ平等と推かり竟小卯

木をぢりゝせて衣服を脱とう襦布づきの二百兩を奪
ひとり赤裸ゆして一邊る松の木小縛りつけ皆散々小逃
失らる寔小是天人を以て人を制すと宜らうる小卯木佐
和弥太宵小盗さう二百兩を又偷賊小奪ひ去り斯松
の木小縛られさむ足あの悶動めんどうと行と扱あはば咽のどの渴かわた腹
を飢うてらるる小卯の眼まなこのなみだと泪なみだ小一夜を明あらうあのあのあ
よひて最清らるる一挺の大轎こしの小こつて一連の僕やく武ぶを列い
て通とり玉たま小脚あし方かたあり卯木うの是これを見て嬉うれしく思おもひ太悲かな
し氣げらるるこきあをあて助たすけあへくと叫こゑびならば大轎こしの裡うち
けきをこつつけ女時おんなとき兼轎かねこしをかへよと曰いわふぞ脚あし僕やくの人々ひと阿

全書新編言海

とのく入て暫く大轎を下ける頻て戸をひらけて立出る人
 を見らる小香染の衣を着し七條の袈裟をうけてさも珠
 勝氣する老僧志づくくと歩まより佐和弥太が光景をの
 ろくと打詠めそのれが賤しくさる人物もが奈何事ふ
 ようて斯る夏目めや遇めふぞと向もなれば佐和弥太の涙
 と流し偽ていりうらな小性の洛陽がら然る堂上お仕へる
 者もが朋輩の謔言ふよりて不意浪々の身とより浪蒼
 ろる知音を便りて下りふたや其人の死去て跡も定る
 ぬ小頼む木の下雨漏心地を詮術もく南都のく人赴くと
 夜をこめて爰を越侍の小堂をうらんや大勢の山客小生會

路金の更うらまのふごく衣服大小も奪ひとく也斯の仕合
 面目ゆり仕合せゆて侍ふあそと御忌悲おけ繩をくた
 てのうらま再世の御思るふと涙を流して頼るるも彼老
 僧の不便お思ひその極めて難免ふこそ有つめ疾繩を解て
 まわらへとと奴僕お分付頓て佐和弥太が縛ごと死ま
 め後宮の内より春替の小袖を取いて卯木小著せ先
 我寺追まらぬ人東も西もて徳徳てまわらんと世小頼
 母云云玉ひくふぞ卯木の水舟の骨小あへる心地
 て飲ぶ支限くく竟お彼老僧が跡小従てて行ふくこの
 老僧は是南都般若若寺の万福上人と嘗え道徳のく死

